*バイリンガル・マルチリンガル子どもネット（BMCN）　BM 子ども相談室主催*

第 8 回 BM 子ども相談室 勉強会 報告

海外で育つ言語形成期の子どもたち

*―複数言語を伸ばすための保護者・教員への助言とは？―*

開催日時:2023 年 1 月 15 日（日）9:00-11:00 AM（JST） オンライン開催
講師：中島和子氏（トロント大学名誉教授）

**講義要旨：**

1 歳半の子ども（写真*）は、両親が携帯電話を使って複数の言語を使って話しているのを真似て、テレビのリモコンを耳にあてて何かしゃべろうとしている。4ヶ国語（英語・仏語・中国語・日本語）に触れて育つこの子は、一体何語を話し出すのであろうか。

複数言語時代を迎え、継承語教育の実践・研究も、この 20 年間大きな変化をしてきた。まず 2005 年ごろからファミリー・ランゲージポリシー（FLP）がビリーフ、言語実践、言語管理などのキーワードで議論されるようになった。更に画期的なのは、「継承語」をいわゆる「言語学」の一領域と捉える Montrul ら（2016, 2022）の研究であろう。継承語の習得を「早期バイリンガル習得」として位置づけ、誕生から 70 歳までのライフステージで複数言語がどのように発達するか等を論じている。また「第二言語習得」（Second Language Acquisition, SLA）と「（継承語と現地語）バイリンガル習得」との違いにも触れている。

そして近年、最も大きな影響を与えているのがガルシアら（2011, 2017 他）が提唱するトランスランゲージング教育学であろう。社会の公正性を守る立場から英語偏重ではなく、将来を担う「複数言語話者」として、彼らの継承語も含む複数言語を学校教育の授業の中でどう活用しながら育成すべきか等について、具体的な例を挙げてその手法を示している。いずれも社会言語学の立場からの提言であり、言語能力の捉え方その他では、カミンズ博士に代表されるいわゆる「バイリンガル・マルチリンガル教育理論」とはやや異なる。

ＢＭＣＮの BM 子ども相談室は、Montrul（2016: 123 図 4.9）が示す4つの複数言語育成に関わる要因や状況（①言語のインプット・アウトプットの質と量、②家庭言語使用と同年齢の子どもとの言語使用、③言語に対する態度とアイデンティティ、④学校教育へのアクセスやそれぞれの言語の社会・政治的立場）を踏まえて、子どもの発話やコミュニケーションに関する情報を集めて、個々のケースの相談にのるといいのではなかろうか。世界各地の BMCN 会員からの情報提供も大切である。
（＊写真および参考文献は、スライドを参照ください）

**ディスカッション・質疑応答：**

1. 海外の継承語クラスはアメリカ的な学校文化が浸透し補習校は日本的な学校文化が残る。この違いは帰国組と永住組、国際クラスなどのことばにも表れるように、長く認識されてきた。「継承語教育」は、このどちらの営みも含むものと考えている。

2. 子どもが持つ全ての言語を伸ばす理由・意義について。

複数言語の社会において、子どもが持つ全ての言語を伸ばすことは，その社会から得られるものをフルに活用し、子どもに最大限の機会や可能性をもたらすことにつながる。

3. 「複数言語を伸ばす＝子どもの可能性が広がる」は、全ての子どもに当てはまるか。

少なくとも障害のない子どもの場合は、複数言語を伸ばすことが、可能性を広げることにつながると考えている。ただし、自閉症のような言語そのものに関わる障害がある場合は、専門家の判断や介入が必要になってくると思われる。

4. 言語発達の点で、モノリンガルとバイリンガルではどちらが難しいか。

多くの子どもたちが複数言語で育っている中、また多くの子どもにとって選択の余地がないことから、どちらが易しいか難しいかということを判断するのは難しい。少なくとも、言語が複数であることが原因で障害が起こる、ということはないため、どちらがいいかという議論ではないと考える。

5. 日本国内の継承語学校で、1 日 2 コマ　言語、1 コマ　文化　計 3 コマのカリキュラムをしている。言語 2 コマのうちの、2 コマ目に言語ではなく数学を教えることは効果があるか。

「数学」に固定せず、生徒が興味を持っている知的内容・教科内容にするのがよいと思う。

（文責　鈴木・奥村　2023.1.20）

※本勉強会は「真如苑多摩地域市民活動公募助成」の助成を受けています。